

平成23年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	23K08	氏名	三木 和子
研究主題 —副主題—	小学校特別支援学級における授業の在り方についての実践研究 —将来に生かすスキルを伸ばすために		
所属校	足立区立本木小学校	派遣先	帝京大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>私がこれまで特別支援学級の担任として児童と関わっていく中で気になっていたのが、学習で得た知識が断片的になりやすく、実際の生活の場になると応用が難しい傾向の強い児童への学習展開の方法であった。生活の場面で活用できるような学習を展開するには、どのような指導を行うことが望ましいのかを研究し、実践へと生かしたいという思いから本研究を行うことにした。また、特別支援学級を取り巻く問題意識の背景としては、①障害の多様化など、時代の変貌と児童の変化に対応しながらの学級づくり、学習指導をすることが求められていること。②全国の小学校知的障害特別支援学級の学級数は増加傾向に転じている中、担当する教員の経験年数は3年未満の教員が最も多く、全体の55%は経験が6年未満であり、教育の充実が求められていること。③在籍している障害のある幼児児童生徒については、一人一人の教育的ニーズに応じて、学習上の特性を踏まえながら、適切な指導及び支援を行うことが重要であり、指導の充実が求められていること等が挙げられる。そこで本研究では、次の2つのことを検証することにした。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 障害の特性や発達段階を踏まえた指導題材の配列を検討する。 2 将来に生かせるスキルを伸ばすための具体的な授業の進め方を探求するため、授業実践を通じ、効果的な指導の在り方を実践的に検証する。
II 研究の方法	<ol style="list-style-type: none"> 1 知的障害特別支援学級における指導題材の配列 指導の充実のためには、在籍する児童の実態に合った教育課程の編成や年間指導計画が明確化されていることにより、将来に生かすスキルを伸ばすことができるのではないかと考え、指導題材を掲げることにした。創意工夫を生かした具体的な年間指導計画の作成を探求し、児童の実態を考慮しながら生活に生かせるスキルを伸ばすための単元や題材を構成する。 2 WISC-Ⅲ知能検査を用いた実態把握 授業実践にあたり、児童への手立てを明確にするため、認知特性や偏り等のプロフィールを明らかにすることを目的とした検査を公立A小学校特別支援学級に在籍する2、3年生で構成された中学年グループ5名を対象に行う。5人全体の群指数パターンの傾向の把握に努め、授業での活動のヒントを探る。 3 授業実践 知能検査の結果や、行動特性をもとに授業を行う。対象は上記に示した児童と同様である。学習教科は自立した生活を送る上で、必要性のあるものの中から、「時間・時刻の理解」を設定した。算数科の授業として、単元名は「今なんじ」の授業を行う。学習内容は何時、何時何分の時刻を読む練習を行い、児童の日常の生活を振り返りながら、実生活での出来事をイメージし、時刻と結び付けていくことを中心に学習する。 4 児童の変容 単元全体の学習内容の定着度を評価するために、単元終了後に「時刻を読むこと」と、授業で用いた教材の模型時計で「時刻を表すこと」の習熟テストを行う。習熟テストは対象児の個別の実態に合った問題をそれぞれ5問ずつ、10問作成し、同様のテストを計3回行い、児童の習熟度を評価する。

<p>III 研究の結果</p>	<p>1 WISC-III知能検査の結果</p> <p>群指数の結果から対象児全体に見られる傾向として、次のようなものが挙げられた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・VC（言語理解）…指示理解などの言葉を理解することや理解した内容を他者に表現することに困難が見られた。 ・PO（知覚統合）…物事の本質を視覚的に見極める力は優位であることが把握できるが、児童にばらつきが見られ、標準偏差が大きく、この群指数が弱い傾向にある児童への支援が必要であることが把握できた。 ・FD（注意記憶）…注意の集中や持続が困難であり、言葉や数をすぐに覚えることや、思考内容、概念等を言葉で理解する能力に弱みが見られた。 ・PS（処理速度）…目と手の協応の力などの物事を素早く処理することや目で見たことをすぐに覚えることが困難である。 <p>4つの群指数の傾向から全体としての傾向を把握することができたが、それぞれ傾向の相違も見られた。全体の状態像を捉えながら、個々に支援が必要な部分はプロフィールを参考に個別に補っていくことの必要性が重視された。</p> <p>2 授業評価</p> <p>実態把握による認知特性や行動特性を参考に、学習指導計画を立て、活動内容、教材の選択、支援方法等に役立てることが可能であった。また、「見通しをもたせる指導」を行ったことにより、児童が安心して学習に望むことができた。安心感を与えたことが学習への集中力・理解力に影響し、児童全員が学習に集中することで、友達同士の学び合いにも繋がると考えられる。さらに、「授業における個への配慮」を教師が行ったことで、学習集団全体により影響を及ぼし、全体としてまとまりのある授業となることが授業記録や記録映像から明らかとなり、教師が児童の特性を細部まで予想しながら計画的支援を行うことが重要であることが把握できた。</p> <p>3 児童の変容</p> <p>「時刻を読んだ結果の正答率」と「模型時計で時刻を表した結果の正答率」はどちらも授業を行ったことで以前よりも上達している傾向にあり、テストの回数を重ねる度に正答数が増えていることが把握できた。</p>
<p>IV 考察</p>	<p>特別支援学級に在籍する児童が、将来に生かすスキルを伸ばすためには、適切な授業を創意工夫する必要があるが、学習活動に生活的なねらいをもたせ、生活に即した活動を加えながら段階的に指導する必要があることが授業実践より明らかとなった。</p> <p>特別支援学級における効果的な指導の在り方を2つ掲げた。1つは、実態把握から授業づくりまでの一連の流れを示し、児童の行動特性や検査結果をもとに、個別の指導計画や個別の支援計画、年間指導計画、そして単元設定を立てていくことを表した。もう1つは、授業実践において指導者が効果的であったと感じた視点をまとめたものであり、児童の実態把握を軸に、「実態に基づく計画的な個への配慮・働きかけ」「意欲を喚起する肯定的な言葉かけ・評価」「安心して学習できるよう見通しをもたせる」の3つを互いに関連付けることで、児童の視点に立った授業が成立することを表した（図式化されているものは本編または別途資料を参照のこと）。</p> <p>本研究の課題は2点挙げられる。どうやって般化していくのかということであり、教師としてどのような働きかけが考えられるのかを追究する余地がある。もう一つは、教員の指導力の向上である。児童理解や授業改善についての研修等を組織的に行いながら、教師としての資質を向上させていくことが求められる。若手教員や特別支援学級を初めてもつ教員が、意欲的に指導力を向上させていけるような環境を整えていきながら、児童への指導にあたることを求められる。</p>